調査コラム第 44 回　「嫁ケ島に温泉は湧いたか」

（元松江市文化財課長/岡崎雄二郎/2024 年 6 月 3 日記、2025 年 4 月 14 日一部修正）

はじめに

嫁ヶ島（よめがしま）はご存知の通り宍道湖南東に浮かぶ、全長 107 メートル、幅 26 メートル、周囲約 240 メートルの小さな島である。

私は長らく嫁ケ島のガイドを務めている。嫁ケ島のことについて色々調べたら、地元の乃木公民館で刊行された『乃木郷土誌』に様々な記述があった。一部を紹介すると

> *嫁が島の弁天様は宍道湖の水神として祀られたが、江戸時代以降は婦人病に対しても霊験があるとして、女たちの参拝者が多かったという。殊に島の西南部に盥（たらい）岩というのがあって、腰を浸すと効果があるとされ、難病に悩む婦人たちが夜遅く人も眠るころ、ひそかにその岩に奇功を祈るものが少なくなかったといわれる。*

しかし今、嫁ケ島で湯が湧いている気配はない。全て分かっているようでも、まだ分からないことも多い。本当にこんなことがあったのか、調べてみた。

1. 既出史料

奈良時代 733 年成立の『出雲国風土記』によれば、この島は意宇郡の条の最後に「蚊島」という名前で登場する。

> *野代の海の中に蚊嶋あり。周り六十歩あり。中央は涅土にして、四方は皆磯なり。〔中央に手掬ばかりの木一株あるのみ。其の磯に螺子・海松あり。〕*

長さにして今の半分、面積にして４分の１くらいの本当に小さな島だった。語源は分からないが、蚊に例えたのだろうか。いやいや、わざわざ人から嫌われる虫の名前を付けたとは思えない。島名の問題はここでは置いといて別稿で論じたい。

風土記では島の大きさや形状を記すのみで、湯が湧いたという記述はない。一方で、同じ意宇郡の忌部神戸の条に「神湯（かみのゆ）」の記述がある。今の玉造温泉のことで、体に効き万病が治ると記されている。蚊島は、仮に湯が湧いていたとしても、わざわざ舟で渡らなければならなかったので、あまり注目されなかったのかも知れない。

時代は降って江戸時代、よくご存じの悲しい「嫁ケ島伝説」が登場し、いくつかの松江城下町の絵図にも様々な形で島が描かれている。しかし、湯に関する記述はない。

2. 嫁ケ島とその周辺の泉源

そこで地元の乃木地区や周囲の人に聞いたところ、泉源について少しずつ分かってきた。今のところ嫁ケ島で３か所、袖師町の元山で２か所あった。下の表の通りである。

【表 1】嫁ケ島と周辺の泉源			
地点	場所	遺構	根拠史料など
1	島の西側浅瀬	塩化ビニール管とその保護台部が水面に見える	地元聞き取りによる
2	島の南西部、護岸	護岸が内側に著しく屈曲している	地元聞き取り。船着き場との説もある
3	島の南東部、護岸付近	泉源が確認されたわけではなく、温泉ボーリングを実施している段階である	『松江・安来今昔写真帖』に嫁ケ島へ渡る子どもたちの背景に三又が写っている
4	袖師が浦の干拓地のうち、今のコンビニエンスストアの駐車場内	以前、泉源の所在地点を示すプレートが駐車場内にあったというが、今はない	埋め立てで廃止された時の工事記録写真 2 枚（圓成寺所蔵）
5	袖師が浦の干拓地のうち、今のコンビニエンスストアと北側の袖師焼窯元住宅地との間の土地	南半部は倉庫が建つ。今も深度 1300 メートルから自噴し、泉温は 64.6 度、湧出量は毎分 21 リットルある。北半部は「命名嫁ケ島温泉元湯」石碑と浴槽の残骸が保存されている	所有者の菅野紘氏に聞き取り調査し、後に現地調査した。

以下、地点ごとに検討してみよう。

第 1 地点

【写真 1】島の西側の浅瀬（第 1 地点）

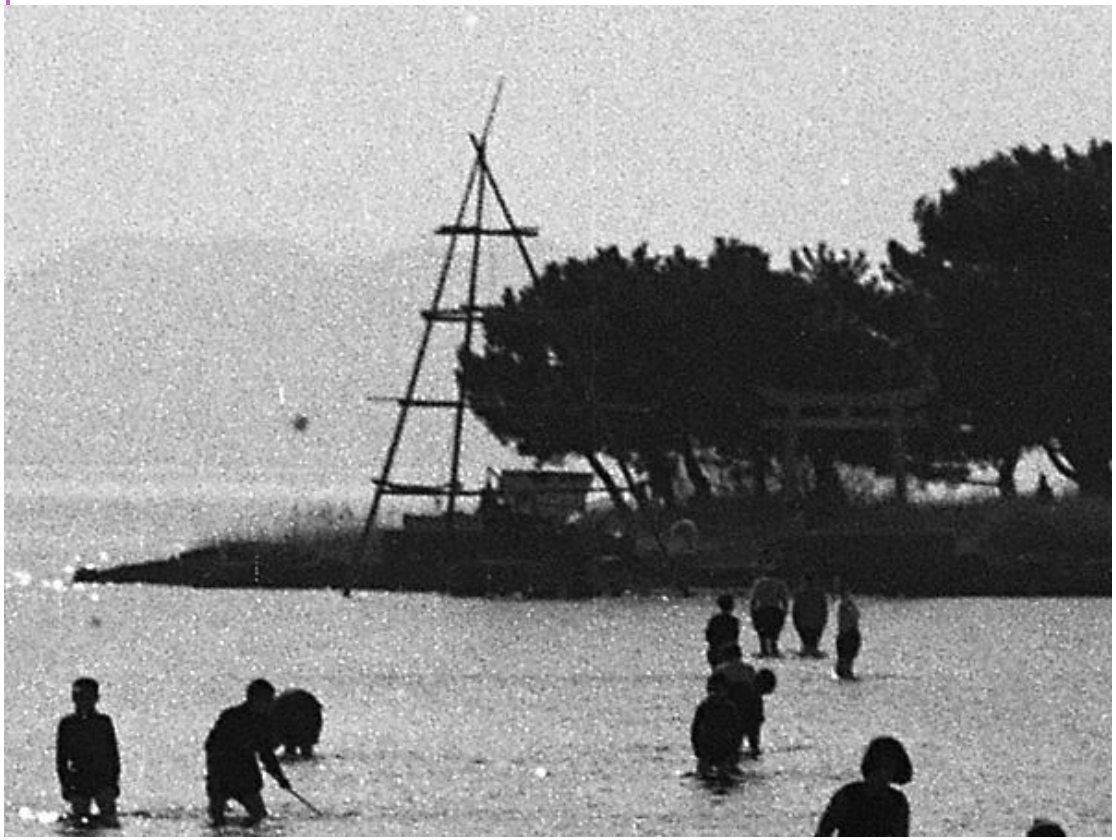
島を西側に延長した浅瀬の中にあり、塩化ビニール管とその保護台部が見える。温度は未確認。

第 2 地点

【写真 2】引っ込んでいる南西部護岸（第 2 地点）（迫光徳氏提供）

周辺の護岸は島石のケンチ積みで頑丈なものである。さらに、外周にはいわゆる如泥石の護岸石が 2 列に亘って連なる。入り込んだ部分は奥行き約 3.7 メートル、横幅約 2.6 メートルで屈曲している。『斐伊川誌』によると、昭和 55 年度に 30 メートル、同 56 年度に 108 メートルの修復工事が実施されていることが分かる。平面図台帳を見ると当該箇所は昭和 55 年度に施工されている。あくまでも護岸修復工事なので、おそらく最初に構築されたのは、それ以前の近代であろう。当時の工事図面が残されているが、当該部分については今と変わらない形状で施工されており、何ら説明がない。また、松江市所蔵の嫁ケ島の図（水彩・仮称・昭和初期か）を見ると当該部分の如泥石は設置されていないことが分かる。今、足をつけても温度は周囲と変わらない。仮に船着き場と想定しても、平田船が護岸に対して直角に接岸しなければならず、底も浅いので難しいのではないだろうか。

第 3 地点



【写真 3】伊藤英一氏撮影「嫁ヶ島まで歩く」（部分）、嫁ケ島で温泉ボーリングか（第 3 地点）

『松江・安来今昔写真帖』には昭和 30 年代に伊藤英一氏が撮影した「嫁ヶ島まで歩く」というタイトルの写真の背景に嫁ケ島が写っている。島の手前水際に三又（さんまた）が、三又内側の下方にホースやロッドが見える。三又のうち 2 本が東岸から突き出た水面に見えるので、汀線のところがボーリングポイントだったと思われる。もう一人の嫁ケ島ガイドである吉田薫さんの話から、協和地下工業株式会社（現在：協和地建コンサルタント株式会社）が請け負って掘ったらしいということが分かったので、同社の温泉・水資源開発室室長の守岡康一さんに詳しい話を聞いた。守岡室長の話では、昭和 39 年 6～12 月に松江観光旅行組合の依頼で嫁ケ島温泉サク井工事を行ったが、その時の写真ではないかということだった。

第 4 地点

【写真 4】コンビニエンスストアの駐車場現況（第 4 地点）

「（仮称）ファミリーマート袖師店新築工事」で泉源を埋めた時の工事記録写真が 2 枚、土地所有者の圓成寺に残されている。いずれも「株式会社フル技建、温泉埋設配管状況」と記され、1 枚は「道路より 7200」、もう 1 枚は「建物より 9400」と記されている。この数字がミリ単位の長さを示すものなら、道路は歩道の端、建物は北側の倉庫の端か土地境界線と考えられる。今のコンビニ駐車場の北西部だったことが分かった。

第 5 地点

【写真 5】今も湧き出る温泉の湯（第 5 地点）

もともと温泉が自噴していたポイントは湧出量が少なく温度も低かったため、後述する菅野一氏が発注し、昭和 52 年に深度 1300 メートルまで掘進した。カリウム、マグネシウム、ナトリウムなどを含む 64.6 度、毎分 21 リットルの温泉水が出た。今も自噴しており、無料で市民に提供されている。

3.「嫁ケ島温泉元湯」石碑と「湖岸ホテル」

第５地点北半部の空き地の中央に「嫁ケ島温泉元湯」と刻字した石碑が建っている（写真６）。その由来について松江宍道湖温泉旅館組合事務局の住田由紀さんに聞いたところ、ここは以前、「湖岸ホテル」があったところで、詳しくは土地所有者である松江青葉病院の菅野理事長に尋ねられたい、とのことだった。そこで松江青葉病院へ行き、菅野紘理事長に色々聞いてさらに調査を進めたところ、以下のことが分かった。

【写真 6】「嫁ケ島温泉元湯」石碑

まず、石碑の石材は宮城県石巻市周辺で産出する暗緑色・粘板岩系の「稲井石」である。高さは約 217、横幅 91.5、厚さ 18.5 センチメートルあり、裏面は内側を約 1 センチ繰り込み文字を刻んでいる。

表面には「命名 嫁ケ島温泉元湯」、その左に「日本大学総長勲一等医学博士鈴木勝書」、裏面には「日本大学理事 医学博士 菅野一建之」「昭和五十三年四月」「宮城県石巻市新橋七一三八 高橋石材店刻」と刻字されている。建碑者の「菅野一」氏は菅野紘理事長の父にあたる。命名を当時の日大総長に依頼したのは、一氏が同大理事を務めていた関係だろう。

石碑の裏手には、かつてここにあった「湖岸ホテル」の浴槽のタイルや、袖師が浦の磯を形成していた黒色玄武岩塊が、いくつか積み置きされていた。

「湖岸ホテル」は、島根県と松江市に保存されている当時の行政文書によれば、菅野一氏が袖師が浦の磯に自噴する温泉源に着目し、昭和 33 年に松江市に建築を申請し、翌 34 年に許可されたものである。湯治場を兼ねた 4 階建てコンクリート造りの「松江観光温泉湖岸ホテル」を建設し、室数 9、定員 18 名であった（写真 7）。泉質は単純温泉で、湧出量は毎分 33 リットル、温度は 26.5 度だった。このため昭和 52 年に深度 1300 メートルまでさらに掘進した。

旅館業の廃止届は、平成 21 年に島根県に受理されている。関係者の証言でも、おばあさんが店番をして、営業は廃業ぎりぎりまで続けられていたようだ。

【写真 7】かつてあった「湖岸ホテル」（菅野紘氏提供）

おわりに

考えてみると、嫁ヶ島周辺には玉造温泉、松江しんじ湖温泉、多久の湯などが名湯としてあるので、掘れば高い確率で湯が湧くかも知れない。今も第５地点の歩道側から無料で大量の温泉水が頂けるのは、大変ありがたいことである。調査は今後も続けていきたい。

（謝辞）

袖師町の自噴する泉源や湖岸ホテル、石碑のことについては、松江しんじ湖温泉旅館組合事務局の住田由紀さんから松江青葉病院の菅野紘理事長を紹介していただいた。嫁ケ島で温泉ボーリングを実施している写真および請負業者の情報は、水の都プロジェクト協議会会員で嫁ケ島のガイドである吉田薫氏のご教示による。またドローンによる嫁ケ島護岸の上空写真（写真 2）は、宍道湖の夕日を愛する会会員の迫光徳氏の撮影になる。記して感謝の意を表する次第である。

参考資料

1. 加藤義成『出雲国風土記参究』原書房、1957 年
2. 乃木郷土誌編集委員会『乃木郷土誌』松江市乃木公民館、1991 年、梅の章「嫁が島物語」108、114 頁、桐の章「昔の道と民間信仰」715 頁参照
3. 建設省中国地方建設局出雲工事事務所編刊『斐伊川誌』1995 年、第 3 章「斐伊川改修のあゆみ」376〜379 頁参照
4. 大橋川コミュニティセンター所蔵「昭和 55 年度嫁ケ島護岸修復工事平面図台帳」、同「護岸台帳」各 1 枚、いずれも転載禁止で閲覧のみ
5. 郷土出版社『松江・安来今昔写真帖』2004 年、30 頁「嫁ケ島まで歩く」
6. 菅野紘氏提供写真には以下のものがある。
    - 白黒航空写真（眼下に浜乃木地区干拓地、山陰線、有料道路、建築工事中の湖岸ホテルが見える）
    - 白黒写真 4 枚（湖岸ホテル建築工事中）
    - カラー写真 1 枚（宍道湖、嫁ケ島の夕日を背景に東京青葉病院、松江青葉病院、湖岸ホテルの紹介写真が構成されている）
    - カラー写真 6 枚（ホテル解体後、近年の湯汲みだし場附近）
    - カラー写真 1 枚（嫁ケ島温泉の石碑）

7. 松江市文化スポーツ部文化財課所蔵「嫁ケ島水彩画（仮称）」2 枚

8. 島根県総務部総務課情報公開係提供行政文書

- 「温泉利用許可について（進達）」（昭和 39 年 7 月 27 日、松保総第 24-3 号、松江保健所長名、厚生部長宛）4 両面 7 枚
- 温泉利用許可について」（決済：昭和 40 年 3 月 31 日）、A4 両面 4 枚
- 「温泉動力装置許可申請書進達について」（昭和 33 年 4 月 25 日付、松江保健所長名、島根県厚生部長宛）、A4 両面 8 枚

9. 松江市総務部総務課情報公開提供行政文書

松江観光温泉湖岸ホテルの許可年月日（昭和年月日）、廃止年月日（平成年月日）などをまとめた表のコピー、A4 片面枚

10.島根県編刊『島根県の地質』1985 年、201, 588 頁参照